

歴史学研究手法の多様性の比較考察にむけて

Eiji Takemura
竹村 英二

緒言

本号掲載の第一論説はイタリアにおける歴史学発展に関するものであり、第二論説は日本におけるそれである。対象とする地域は異なるが、双方ともにその課題の中枢をなすのは、各々における歴史学研究の研究手法的特性、性向とそれを規定する「近代歴史学」発展（乃至導入）「以前」における学問特性についての考察である。

トルタローロ教授は、「プロフェッショナルな」イタリアの歴史学の発展、イタリア史学の「近代化」は、主にトリノ大学主導でのドイツ史学の導入によるものであったと論じる。一方、“前近代”のイタリアは郷土史的歴史学の群雄割拠状態にあり、それ故の多様性、あるいは氏の言う‘polycentric’な性向はドイツ史学導入後も同国の史学研究の性質に大きく影響し続けていたと論じている。

翻って日本における歴史学はどうか。傾向として、日本の歴史学研究の専門誌の多くに掲載（採用）される論文は、それが日本史学であれ日本経済史であれ、はたまた欧州の特定の地域を対象とした研究であれ、膨大な史料の呈出をその特性にもつ、或いは、史料的物量のこれでもかという呈示を殆ど自己目的化しているような体裁をもつ論文が多いように思われる。また、かような傾向は所謂「主要」学術誌の多くにも見られ、そのような性質の業績を量産することを論文投稿者のうちにも暗黙のうちに強いる、或いは投稿者の“自主的な”それへの忖度を結果的に助長するといった傾向すらあるように思う。

そして、このような歴史学の“日本的”特質ともいえるものの根底的次元を探ると、日本における近代歴史学萌芽期における事情、より具体的にいえば、近代歴史学の導入と発展が儒学者によって担われていたという事実突き当たる。とりわけ、同時代の世界的水準に鑑みても極めて高いレベルにあった（中国）古典文献の高等批判の実践者たちによって、歴史学研究の方法の確立が推進されてきたという事実、さらには、自然科学の諸分野も含め近代学問の吸収と実践に尽力した研究者（知識層）のほぼ全員が、もれなく漢学的素養 – “道学的”儒教ではない –、緻密かつ客観的に古典テキストを「分析」する素養／学問的能力を保持した知識層であったという事実は看過できない。

近代科学としての歴史学はその後、帝国大学、諸師範学校を通じて日本全国への拡散をみる。良きにつけ悪しきにつけ、高い実証性をもつ方法が一定の統制をもって全国に共有されてゆくのである。そしてこの、歴史学の形成と伝播の“日本的”特質は、トルタローロ氏の論じるがごとくの‘polycentric’なイタリア史学の発展の様相と好対照をみせる。

トルタローロ氏は、ときにイタリア史学の巨匠の言なども引きながら、“イタリア的特性”とし

ての歴史性、時間的連続性、その継続的認識を実現せしめる可視的その他の諸事物と現世を生きる人間との関係性などに言及、歴史研究者の基底を形成する諸要因と歴史的著述物との連関についても論じる。一方、たとえば歴史的建造物、遺跡に囲まれて日々生活する彼の地の研究者の性質が言及されるも、かような環境的要因が、具体的にどのように歴史著述物の特質にどう影響するのか、具体的分析はない。「地域主義」と歴史学の多中心性に関する議論も、事象同志の因果関係には言及されるも、それ以上の分析には及んでいない。もっともこれらの諸問題は、歴史学研究方法の発展の問題であると同時に、いわゆる通常の“歴史学的”な分析方法・視角では到底解析できない問題である。これらの問題群への接近には社会学の知見も包含した認識論、認知心理研究、さらには他者論、他我構成論など現象学の領域に含まれる方法・視角の有機的導入が必須であり、これらは当然、本論説を出発点に、今後本格的に取り組まれるべき問題である。

同じ手法で画一的に行われているはずの同一分野の研究が、えてして地域／国で、さらには各々の実践者において大いに異なるのは、研究者であれば折に触れて認識する機会をもつものであろう。しかし、実践される方法の相違の根底的規定要因に関する研究は殊の外稀少ではないか。此の度の論説が、じつは極めて注目すべき多様性を呈出する歴史学的研究手法の諸側面の比較文明的考察の嚆矢となることを願う。